

2018年9月3日

立教大学国際学術研究交流制度
2018年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	文学部・教授
	氏名	鈴木 彰
受入学部・研究科・研究所		日本学研究所
招へい 研究員	所属・職	Professor, School of Foreign Languages, Renmin University of China 所属機関所在国：中国
	氏名	Ming Jing Li
招へい期間		2018年7月19日～2018年7月31日（13日間）
研究経費		349,210円

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例）〇〇について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

*「本学との学術協定（学部間・研究所等間を含む）の締結または既存協定の維持・強化に資する活動」を行った場合は、該当する活動内容に※を付してください。

年月日	活動内容
2018年7月19日	来日
2018年7月20日	セミナー開催 テーマ『『三国伝記』における『三宝感応要略録』の翻訳』 18時20分～19時50分 ロイドホール L708 参加者：学生 計8名
2018年7月21日	日本学研究所主催研究例会「第4回 海外の日本文化研究—その動向と可能性—」 に参加、コメント。 14時～17時。7号館 7201教室 参加者：学生・教職員・一般 10名
2018年7月27日	国際センターを表敬訪問。学生派遣に関して意見交換。※
2018年7月28日・29日・30日	日本学研究所主催国際会議「日本と東アジアの〈環境文学〉」にコメンテーターとして参加（1・2日目）。3日目は全体会議とエクスカージョンに参加。 10時～18時30分 太刀川記念館カンファレンスルーム 参加者：学生・教職員・一般 2日間計 200名強
2018年7月31日	帰国

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

李銘敬教授が所属する中国人民大学と本学とは協定校の関係にあり、すでに学生の派遣・受入を中心とした大学間交流が進められつつある。今回、李教授を招聘し、いくつかのプログラムを通じて意見交換することで、この関係を深めていくための基盤を確認し合うことができた。とりわけ、学術研究の面での交流の新たな一歩として、日本学研究所が主催する国際会議へ参加していただいたことも含めて、これからの本学の研究・教育にとって、実りある時間を生み出すことができたと考えている。

期間中に開催したセミナーと国際会議には、本学の教員・学生（学部・大学院）が参加し、東アジアという視野のもとで仏教文学の研究を続けてこられた李教授の、示唆に富むお話をお聞きすることができた。また、期間中に開催された日本学研究所の研究例会に一般参加していただき、その場でも、全体テーマに沿って中国・北京での研究・学習環境について、さまざまな情報提供をしていただいた。いずれも、参加者の問題意識を高め、学習・研究への意欲を刺激する機会になったことはいままでのない。

今後も、本制度を利用するなどして、同大学から優れた研究者を招へいできるよう、調整と努力を続けたい。また、同大学から本学への留学（最低1年間）を希望している博士後期課程の大学院生の受入についての検討が今後の課題となると感じたことを付記しておく。

以下、期間中に開催したプログラムについて、簡潔に状況と成果について報告する。

(1) セミナー

テーマ「『三国伝記』における『三宝感应要略録』の翻訳」

2018年7月20日（金）18時20分～19時50分 ロイドホール L708

参加者：学部生・大学院生 計8名

李教授が長年にわたって研究対象としている『三宝感应要略録』を取りあげ、その日本における受容の一事例として、『三国伝記』における実態について、具体例に即していねいにお話いただいた。単なる依拠資料論としてではなく、異文化の「翻訳」という問題意識を組み込んだお話となり、参加者はそうした問題に関する理解を深めることができた。

(2) 国際会議

テーマ「日本と東アジアの〈環境文学〉」

2018年7月28日（土）29日（日）10時～18時30分 *30日（月）は非公開。

参加者：学部生・大学院生・教職員・一般 2日間計約200名

本年度の国際会議助成を受けて開催された日本学研究所主催の国際シンポジウムに、李教授にもご参加いただいた。初日は基調講演3名とシンポジウム第1・2セッション、2日目に第3・4セッションとラウンドテーブルをおこなった。李教授には、その全体に参加していただいたが、とくに、第3セッション「動植物の交感と食文化」にご登壇いただき、3名の報告内容を受けて、コメンテーターの一人として発言していただいた。

2日間とも、学内外はもとより、海外からの一般参加者もあるなど、会場は座りきれないほどの盛況ぶりであった。この国際会議の開催にあたっては、文学部日本文学専修・立教大学日本文学会が共催の形で協力し、立教大学 ESD 研究所の後援を得たが、本学の複数の学部・学科・専修の所属教員と学生が企画・運営・補助に関与し、それぞれが中国・韓国・ベトナム・フランス・アメリカ・オランダからお招きした講師との国際的な学術交流を深めることができた。また本学図書館には貴重資料の特別展示・閲覧をご許可いただき、それらを

海外からの参加者に間近に見ていただくこともできた。

こうしたプログラムを通して本学の研究動向や研究環境の発信を行うことを意図したわけだが、李教授にはその全体を踏まえて、成果のとりまとめや発信のあり方などについて、貴重なご意見を頂戴した。

(特記事項) 本学との学術協定(学部間・研究所等間を含む)の締結または既存協定の維持・強化に資する活動を行った場合は、下記にその内容を記載してください。

李銘敬教授が所属する中国人民大学と本学とはすでに大学間協定が締結されており、学生の派遣・受入が開始されている。李氏は、当時、担当者としてその協定の締結に関与しており、今回は国際センターを訪問し、学生派遣の条件の再確認や研究所間の学術交流の可能性などについて話し合う機会をもった。とくに、日本学を専攻する博士後期課程の大学院生の受入について、その活用の可能性について意見交換をおこなった。